

「青短」という学び舎

青山学院大学

コミュニケーション人間科学部

准教授 小林 瑞乃

男尊女卑の日本社会でキリスト教女子教育の使命に邁進したスクーレンメーカーによって1874年に開設された女子小学校に始まり、海岸女学校、青山女学院へと展開した前史を経て、1950年に開学した青山学院女子短期大学。当初から名門校と認識され社会的な注目も集め、1978年には入試志願者約一万人となる程に大きく発展します。この「青短」の歴史的・社会的意義について、卒業生の声と教育理念を軸に考えていきます。



率2・5%（男子13・7%）、短期大学進学率3・0%、65年は4・6%（男子20・7%）、短大進学率6・7%で、大学・短大への進学

自体が少数派でした。

各学科では大学4年間に匹敵する学業修得のためのカリキュラムが工夫され、学生には高度で主体的な学びが要求されました。卒業生の記憶にも学問の深遠さに触れた感激が深く刻まれていて、何かを知る喜びや充実感、より深い学びへの欲求など、自身自身の人間形成の土壌となった実感がありました。生涯にわたって学んでいく基本姿勢がここで身につけていったのです。

まず、今年3月終了した卒業生第一期聞き取り調査（1952〜1965年卒）*の結果からみていきます。出身高校と進路状況に関しては、男子は東大や一橋など、女子は地元の短大・四大進学が多数というジェンダー格差の強い進路環境にあり、家庭でも長女は短大に妹は四大へというケースがあり、男性優先、妹優先といった暗黙の了解を当然とした進路選択への影響が見られました。同時に、青山学院の女子教育は両親や教師などから強い信頼や高評価を得て最良の進路先として選定されていました。

つまり、地方出身の進学者の多くは地元進学校に学び、各家庭の教育に関する価値意識は高く、経済的にも比較的豊かな社会階層の上位にある家庭の子女として上京・進学が可能な条件にあり、実力で受験競争で合格を勝ち取った大変優秀な学生達でした。60年の大学（学部）への女子進学

学寮での経験も大きく、集団生活による価値観の変化、互いに切磋琢磨することによる自己変革や内面的成長の場であったと自覚されています。青短時代に生涯の友を得たという声も多くありました。学内外の活動・経験も豊富で、部活や同好会ははじめ、美術館や博物館、演奏会、映画、演劇、歌舞伎、六大学野球観戦、ダンスパーティーなどを楽しみ、自分の意思だけで何でも選択できる自由の謳歌と解放感に満ちています。東京でしか味わえないものに積極的に触れようとする姿勢が顕著で、2年間という限定の中一つでも多くの文化的社会的体験をしていきたいとの思いが感じられました。

今回の聞き取り調査から明らかになったのは、第一に女性の生き方の多様性と豊かさです。女性の就職、継続が難しかった中で働き続けた奮闘努力は次の世代の働きやすい環境作りに寄与したはずで、第二に、

ライフサイクルの中で社会奉仕の諸活動が幅広く実践されていたことです。それは「専業主婦」という言葉から想像される単純なイメージには収まらないものでした。また、各支部の同窓会があることで、家事や育児に追われる時期があってもいつでも主体的に学べる生涯学習や社会的活動に参加できる環境が整っていたことも重要です。特に第一期の卒業生には初代会長や役員も多く、支部の発展に尽力してきました。

青短は世間から「花嫁学校」というイメージが持たれていたようですが、実際は違います。周囲のレッテルをよそに学生の主体形成の基盤となるような高度で緊密な授業が展開されていたのです。それは、歴代学長のメッセージからも明らかです。

例えば初代向坊長英学長は、「生涯を通じて常に自らの未完成未熟を自覚して、真の学問、真の人生はこれから始まるのだと絶えず緊張と精進をもって人生を貫いてほしい」と卒業生を激励し（『青山学院女子短期大学新聞』54年2月6日）、新入生には、恵まれた立場にあることを自覚し、人格の完成を生涯の課題として精進努力するように訴えました（同年6月7日）。さらに、日本や世界にどれほどの民がいようと、「私の占めているこの地歩は私以外にだれも占めることはできない」との強い信念をもって使命と責任に「猛進」するよう述べています（58年4月24日）。

第二代幸田三郎学長は、「個性ある生活」のためには「聡明な判断力」と「創造的能力」が不可欠で、「自らの生命を美しく活かす態度と能力を学ばなければならぬ」として（60年11月1日）、厳しい知的訓練を自分に課すよう論じています（64年9月14日）。教育は与えられるものではなく「新しい価値」を自分の努力で「生み出してゆくこと」であり、その理解が生活の場における生涯にわたる主体的営みを可能にする

と指摘しました（『生涯教育と短期大学』『青山学院報』第68号73年12月10日）。教員の西島正先生は、卒業後が本当の勉強の始まりで、自力で生きて思索し勉強を続けて「英知に輝く美しい婦人となって下さい」、「あなたがいるというだけで周囲に暖かさや希望を与えるような人になってほしい」と述べています（『青短新聞』62年2月5日）。また、「教養とは。学校でならつたすべての知識を忘れ去ったあとに残るサムシングです」「大学という雰囲気のおかげで知らず知らずのうちに獲得したセンスです」という印象的な文章も残っています（同年5月2日）。

こうしてみると、教養教育を特徴とする青短の教育理念と卒業生の学びとが呼応して、一人一人の生き方に結実しているように思えてなりません。青短時代が「心の拠り所」「原点」となり、どんな環境にあっても自己を生き、自分を活かして主体的に人生を開拓する力、奉仕の精神が息づいています。ここに歴史的・社会的に大きな意義があるので、

自分だけ良ければいいと奪い合い傷つけあう精神的荒廃が顕在化する中、人間教育を重視した「青短」の実践は、上滑りの知識の伝授になりかねない大学教育に示唆を与えるものであり、この豊かな教育的資産をどう生かしていくか、私自身の課題として考え続けていきたいと思えます。今日この場に共に集った恵みに感謝しつつ、これで私の話を終わります。

聞き取り調査の詳細は『青山学院大学ジェンダー研究センター年報第3号』（2024年3月刊行）に掲載
https://www.aoyama.ac.jp/wp-content/uploads/2024/03/smcgs_annualreport_20240315.pdf